報告⑤

（特集）各地の高校魅力化プロジェクトを紹介　奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（上）

生徒は奥尻島の町立の高校魅力化で夢を実現することを選んだ

青山学院大学　樋田　大二郎

キーワード　高校魅力化、地域学校協働、島留学、コンサマトリー、失敗で高まる経験値、交流による向上心の芽生え、感性を育てる、ネットワーク、二律背反の地域への思い、関係人口

奥尻高校の島外生（県外生）の成長物語には思わず引き寄せられる。島外生が学び取る学力は、人間力や社会人基礎力の要素が特徴的である。

島外生の北野君と海野さんへのインタビューから分かったことは、奥尻高校の教育は学習の基礎基本と応用の両者を同時に含む教育であり、生徒の知識・技能を高める教育と学習可能性や成長可能性を高める教育が一体化して行われていることである。

島外生は学び取る力、つなげる力、変わる力を高めている。それらは人間力や社会人基礎力と呼ばれている学力と同じタイプの学力であった。たとえば北野君は「失敗がその次の経験につながったんじゃないかなって思いますね」と失敗を通して経験値が高まることを学んでいる。海野さんは、「人とのつながりがほんとにたくさんできた。で、自分がそれを紹介することもできるし、その人のよさを話すこともできるようになったし。もうほんとに、いろんな能力が出れて。人脈も得たし、私がしゃべる力っていうのも、もともとちょっとあったものがもっと大きく」なったという。

島外生の学びは奥尻島の中だけで意味を持ち完結してしまう学びではなく、島外での生活とのつながりをもっている。

奥尻島での生活は、都会で生まれて普通の学校生活を送ってきた島外生にとっては異文化体験であった。インタビューでは奥尻島での学びが戸惑い体験としても語られており、戸惑いがあったという事実からは中学までの体験と奥尻島に来てからの体験の間に分断線があると考えられる。しかし、興味深かったのは、島外生は分断線を感じつつ

同時に意識して分断線を越えようとしていることであった。北野君は帰省したときに、奥尻で得た視点から東京の友人にアドバイスをしている。海野さんは島外のビジネスパーソンとつながっている。北野君も海野さんも島外と奥尻をつなぐ卒業後の進路を描いている。

北野君と海野さんは、目的を持って奥尻高校を選んでいる。魅力化の魅力に惑わされて受験したわけではない。北野君は映像の技術を学ぶ前に奥尻の自然で感性を育てることを選んだ。海野さんは、「人前であんまりしゃべりたくないっていうか、緊張したりあがり症もあって、すごくだめだったんですよ。それを改善したら、とんでもない強みになるんじゃないかっていうのをすごく感じて」奥尻高校を受験した。まぼろしを見て高校を選んだのではないし、偏差値を資料にして進路指導されて高校を選んだのでもない。

島外生二人の力が高まった「背景」には、学校内外の親密な人間関係、生徒自身が自発的に発見する学びの必要性、さらにホンモノ感やトキメキ感、ドキドキ感の存在があった。これらのうち人間関係では、住民・役場職員との協働という親密な関係を築き、北野君は「打ち解けられるみたいな感じで……そういう環境に地元の大都市とかでは恵まれなかった。人と人との温かさっていうか、つながりがもうめちゃ深く感じ」ていると語り、海野さんは「みんながみんな結構、影響力強いっていう感じで面白いなって、すごい思ってる」と語る。また、海野さんは企画書や報告書の作成を町の人に見てもらっているという。

最後に、近年、学校はコンサマトリー（自己充足的）かインスツルメンタル（手段的）かという二項対立的な議論がある。進路のための手段的側面が過度に強調されてきた高校教育を批判する意味を含んだ議論である。

北野君と海野さんからは二項対立を越えた学びの様子が見て取れた。長くなるがそのことに触れておきたい。二項対立の議論では、高校のインスツルメンタルの側面で強調されるのは進学・就職のために今の高校生活は忍耐するという考え方である。コンサマトリーの側面で強調されるのは友情や恋愛や消費的若者文化での欲求の即時充足のために高校生活を送るという考え方である。高校生活でそうした二項対立が起きている場合は、生徒はインスツルメンタルをとるかコンサマトリーをとるかで悩むことになる。しかし、北野君と海野さんを見ていると、これまでの二項対立の議論は視野が狭かったと痛感することになる。本来のコンサマトリーは「いまここ」での生活や感覚が充実していること、本来のインスツルメンタルは自己実現やコミュニティ貢献のための学びを意味していたか、あるいは意味する可能性を含んでいたはずである。

北野君と海野さんは快楽や欲望とは異なる意味で高校生活を楽しんでいる。実際、筆者のインタビュー中は目が輝いていたし、私をしっかり見ていたし、言葉が生き生きしていた。「いまここ」で生き生きとしているという意味でコンサマトリーであった。同時に、北野君と海野さんは仲間や奥尻島のために頑張っていた。仲間や奥尻島の幸福に役立つことを喜びとしているという意味でインスツルメンタルであった。北野君と海野さんは自分自身を仲間や奥尻島の成長や活性化の手段にすること（インスツルメンタル）と自分自身が「いまここ」で生き生きすること（コンサマトリー）を同時に実践していた。

高校魅力化にとって大学や就職先は大事だ。しかし、どこの大学や企業に入るかは最優先事項ではない。最も大事なのは自己実現やコミュニティの幸福のために大学や企業で何をするかである。北野君と海野さんは人々と島の架け橋になることや島の役に立つことを考えており、そのことを「いまここ」で実践している。このとき、「いまここ」で大事なのは快楽の感覚ではなくて、生き生きとすることだ。従来の二項対立の議論に取り込まれると二項対立を解消することが見失われてしまいがちである。北野君と海野さんは自己実現と地域貢献をするために、「いまここ」の高校生活を生き生きと暮らしていた。

1　参加している高校魅力化の取り組み

北野君も海野さんもやりたいことがいっぱい、やっていることもいっぱい。北野君は、人口が少なくて課題が多い奥尻ではマクロな視点でものごとが見れるようになるという。海野さんは廃業したホテルの再利用をしたいという想いから出発して、なぜそう想ったかを考えて、実は自分はホテルの廃業とともに廃止されたフェリーの航路を復活させたいのだと気づき、さらに考えてフェリー航路を復活させたいのは島の人のために何かしたいからだと気づき、島の老人のために老人が健康でいられる島にしたい、というように自分の想いを深め自分が何をしたい人なのか、島の役に立つにはどうしたらいいのかを問い続ける作業をしている。二人にとって課題は与えられるものではなく、問うものであり深めるものであった。

――それでは、順番に質問させていただきます。お名前は何と呼んだらいいですか。北野くんと海野さんでいいですか。

北野宏志：はい。

海野友美：はい、大丈夫です。

――まず、具体的にどんなことをやってるか、教えてください。北野くんはどんなことをやってますか？

北野：最近だと「町おこしワークショップ」で、自分はエネルギーっていう課題についてやるんですけど。地熱、奥尻の地熱を使って、奥尻ってやっぱりバスとか、交通手段が三時間に一本とか四時間に一本とか少ないから、「地熱で電動自転車を動かしたりして、今やろう」という企画を考えています。

――すごいですね。ここの学校は、生徒の考えるスケールが大きいですね。

北野：大きいですね。僕、地元が大都市だったんでわかるんですけど、地元の大都市って人がたくさんいるから、いろんな役職があるじゃないですか。だから、何か役職にあたるときも、結構小さいです、やることの幅が。でも、こっちって人数少ないし、かつ課題もめちゃめちゃ多いから、役職ついたらとんでもない範囲でその課題とか見なきゃいけないじゃないですか。だから、ミクロっていうよりかは、結構マクロな視点で見れるなっていうのが、ほんとにこっち来て思いました。

――では次に、海野さんにお聞きしましょう。海野さんはどんなことをしてますか。

海野：私は先ほど、北野が話してたんですけど、「町おこしワークショップ」。これは、全校みんな取り組んでいる町おこしのものになっていて、これで私は、農産業を担当させていただいています。今、お話を進めながら企画作りなどをやっています。私のグループは、一人一つ企画を作ったりとか、そういった感じで、「質よりも先に量を出して、それで質を高めていこう」というかたちで企画を立てさせていただいてて、今、まだグループ内で、私も提案して話してはいないんですけど。

最近ですと、奥尻の農家さんに短くても三日間とか、夏休み中に外から人を呼んで、農家さんの手伝いとか、そういう農家の勉強をするような林間学校に近いようなかたちの、そういったイベントを行ったら、奥尻での関係人口が増えるんじゃないかなということで、私はそういう企画を考えさせていただいたりしています。

パブリシティの方は、私は去年まで実はスクーバダイビングをやってました。耳が痛くて潜れなくなってしまったので、パブリシティの方に移りました。パブリシティは、「緑館ホテルが閉館してしまった」ということで。緑館の再利用を検討していたんですが、「なんでじゃあ、緑館再利用したいのか」という点で考えると、「フェリーの瀬棚（せたな）便を戻したいよね」とか。あとは……。

――瀬棚便？

海野：そうですね。瀬棚便が今年なくなってしまったんですよ。

――瀬棚と奥尻間のフェリーが今年なくなった？

海野：はい、そうなんですよ。来てたんですけど、今年なくなってしまったので。なかなか難しい問題ではあるんですけど、瀬棚便を復活させることを考えていて。

ただ、「瀬棚便を復活させることっていうのは、誰のためになるんだろうか」っていうことを考えて。もちろん、「島外の人とかが便はやっぱり楽になる」っていう点では、とてもいいことだと思ったんですけど。「そうじゃなくて、パブリシティで考えたいことは、『島の人のため』ということを考えたいっていうことだよね」っていうふうになって。人口がどんどん高齢化していくなかで。じゃあ、お年寄りの島になってしまうのではないかっていうことで、「お年寄りが増えていっても、みんなが元気に過ごせる、そんな島にしたい」ということで、今は「健康ランドを造ろう」みたいな感じになっています。

心身ともに、そういったお年寄りが、例えば八〇歳のお年寄りがもうサッカーとかテニスとかバンバンやってたら、めちゃくちゃ面白いじゃないですか。「そういうのをできるような島になったら、とっても面白いよね」ということで、今そういったことを企画させていただいています。

ＯＩＤ（※）は私が今部長を務めさせていただいている部活動になります。ＯＩＤは、二〇一七年に、私たちの先輩、去年卒業された先輩方が、クラウドファンディングを行って、返礼品としてＴシャツを

（※）：OIDはOkushiri Innovation Division（オクシリイノベーション事業部）の頭文字。

送って。で、約一五〇万円集めることに成功して、それから持続するために、部活動として作ったっていう感じです。

最初はほんとに、当時三年生だった先輩方が二人と私で、部員を集められる期間のうちに一応、去年一年生だった私たちのなかから五人集めて、現在は一年生一人と、二年生が三人というかたちで活動していただいています。活動の内容は今年やったものだと、奥尻の地酒のラベルというか、パッケージのデザインをさせていただいて、バックでお金をちょっともらって、それを遠征費に回して、というかたちをとったり。去年やったものだったら、地元に貢献したものだったら、工事用仮囲いにデザインを描かせていただいて。それを、地元の土木関係の方と協力して作らせていただいて、工事用仮囲いにそのまま付けて置いたりしました。

今は、まだあんまり本格的には動き出してないんですけど、ワインの奥尻ワイナリーさんのロゴマークのデザインだとか、デザイン系だとそういう感じで、地元に貢献できるようなものは取り組んでいたりしています。

あと、そうですね。自分たちでやってることとしては、販売活動が今は軸になっていて、去年は返礼品で渡していたＴシャツのリメイクをして、色を変更してまた販売してそれを三大祭りのなかで売ったりだとか、奥尻の学校祭で売ったりして、そういった感じでやらせていただいています。また今年は、新しく奥尻高校の公式のタオルを作らせていただいてそれを売って、先日完売しました。で、今後としては、「スウェットを企画して販売しよう」というかたちですね。

あとは、企業さんと組ませていただいたりもしています。今の段階では、無印良品さんととても関わりが深くて。「ローカルニッポン」と

いった、地域のことについて書いてある記事を集めているサイトに書いて上げさせていただきました。その書いた文字の量のお金をいただいてそれをまた遠征費に回してというかたちで、循環させていただきました。

あとは、「つながる市」というイベントがありまして、それをシエスタハコダテさんでやっているので。そちらに参加させていただいて、販売しました。先日、Ｔシャツとかタオル以外はもう、奥尻のものはすべて完売になりました。こういった感じです。今後は、冬はなかなか動ける時期が少なくなってくるので、ネットを運用できるように検討したりだとか。あとは、夏に向けての企画をもう作って、動けるようにしておくだとか、そういった感じで活動していくかなと。あとは、秋口に販売検討しているスウェットの準備も、そろそろ始まりますね。

――なんかすごくいっぱいやっていますね。

海野：そうなんですよ。結構、やってて。

――忙しくないですか？

海野：そうですね。部活動の方は、もうずっと忙しい感じです。

特に、私たちの下の代の子たちが、今一人しかいないので、「ここで終わらせてしまったらやっぱりもったいない」っていうのがあって、自分たちの代でできる限り、残せるものを残してあげないとな、と思ってですね。

2　高校魅力化の活動のやりがい

北野君は、「変化というか刺激みたいなもの」がほしいなと思って、奥尻に来た。自分が結構大きい仕事を任されてるから、それ自体やりがいがあると教えてくれた。さらに、大きな仕事のなかでも、いろいろあるから、「自分がどれを調べなきゃいけないのか」、「どれを取らなきゃいけない」のか、自分から考えて、能動的に動かなきゃいけないというのもやりがいだという。そして、失敗を通して、経験値が高まったという。また、活動してみることで自分が見えてきたという。

でも、いざやってみると、実際大変だけど、でも何かを仕切れたり、何かを指示したりっていうことが自分は向いてるなっていうことがわかりました。（インタビューより）

海野さんのやりがいは、

よくしゃべるけど、人前であんまりしゃべりたくないっていうか……でも、「よくしゃべれるね」って言われて、自分のそれが長所だなっていうふうに認められるようになって、自信がついたりしました。人にほめられるっていうのが、やっぱりうれしくて、それもやりがいだし……もちろん、自分たちで考えて、「いや、高校生が」って、「よその子が、よくこんなに考えてくれたね」って、そういうふうに認めてもらったり言ってもらえることが、すごく私にとってはやりがい。（インタビューより）

――どういうことをやってるかなということが、わかってきました。

次に、活動のやりがいについて。まず、北野くんから教えてください。

北野：活動のやりがいは、やっぱりさっき言っちゃったんですけど、自分を通して仕事をやってる感みたいなのがあるっていう。ミクロな視点で実際に仕事をやってるんじゃなくて、自分が結構大きい責任っていうか仕事自体を任されてるから、それ自体をやってるやりがいみたいなものがあるっていうのが一つと。二つ目としては、結構大きな仕事でも、そのなかでももちろん、いろいろあるから、「自分がどれを調べなきゃいけないのか」、「どれを取らなきゃいけない」っていうのを、自分から考えて、能動的に動かなきゃいけないっていうのが、やっぱ大都市と、こっちの違いかなっていうのを思っています。だから、能動的に動けるっていうのが、やりがいみたいな。ちょっと難しいんですけど。

――同じことを、やりがいじゃなくて、苦痛だと思う人もいませんか。

北野：いますね。

――でも、どうして奥尻高校の生徒は、こういうのがやりがいになっちゃうんだろう？

あるいは、北野くんの場合、やりがいになるんだろう？

北野：僕の場合は、中学までずっと、地元の大都市生まれで地元の大都市育ちだったんです。けれど、なんか変化というか刺激みたいなものがほしいなと思って、奥尻に来ました。

だから、みんながみんなそういうわけじゃないけど、「何かをやりたい」だとか、「中学でできなかったことをやってみたい」だとかっていう人が多分、結構いると思うから。みんな能動的に動けたり、こういう「町おこしワークショップ」っていう、みんなが一個の課題について、いろいろ考えるっていうことができるんじゃないかなって思ってます。

――いったん、町おこしを離れて、生徒会長としての話を少し聞かせてください。

地元の大都市のイメージとの比較になっちゃうんだろうけども。生徒会活動、あるいは生徒全般の能動性について、どんなふうに感じます？

北野：まず、僕が生徒会になったときは、まだ一年生だったんです。そのときに、先輩方が誰もやってなくて、一年生のみの生徒会になっちゃったんですよ。それで、自分含めて役職が四つ、生徒会長、副会長、書記、会計があるんですけど、それに一人ずつしか入らなくて。ほんとに何かイベントとかが近づいてきても、実際何をやればいいのかっていうのが、ほんとにわかんなくて。もう活動のやりがいっていう面で答えるとしたら、やりがいはもうめちゃめちゃありましたね。あったし、いろいろ失敗したんで、めちゃめちゃ経験値積めたっていうとこでもあります。

あと、何かイベントが当日本番になって、全体を仕切るっていうところが、ほんとに難しいなっていうことは、改めてわかったみたいな感じです。それこそ、奥尻は特にみんなが、さっき言った能動的に動

くから、受動的に動いてくれるっていうことが難しいかなっていうのは思いました。

――みんなが能動的に動く？

北野：能動的に動く。

――言い方変えると、「勝手に動いてしまう」というところもある？

北野：そうですね。個人的になんか、勝手にいろいろ動いちゃうんです。それに対して、先生方も「何かイベントだったら、それは生徒全体でやれ」っていうつもりなんで、あまり口出しっていうかアドバイスとかはくれないんです。それも含めて、みんなが能動的っていうか勝手に動いちゃうので、それも難しかったなっていう面はありましたね。

――今、「失敗を通して、経験値が高まった」ということだったんだけども。具体例を一ついただけますか。

北野：具体例としては、例えば球技大会があったんですけど。そのときに、一応全体を通して、何も事故もなくてうまく通したけど、実際、生徒会で話し合ってたのは、準備とかがほんとスムーズにいくみたいな感じで。「ボールはここにあるから大丈夫でしょ」みたいな、「下調べも一回したから、大丈夫でしょ」みたいな感じで生徒会で話し合いました。でも、いざ本番になってみると、やっぱ結構、トラブルが起きたり、時間とかも大幅にロスしてて。で、最後の試合とかもあんま

りできなかったです。だから、「これはちょっとだめだな」、「次回につなげていこう」っていうことで、失敗がその次のための経験につながったんじゃないかなって思いますね。

――そういうのはやっぱり、あらかじめわかるというよりも、経験して高まっていく？

北野：経験値として高まりました。あと、自分の経験値とすれば、やっぱりこういう奥尻高校っていろんな人が来るから、生徒会長として校外の大人と話す場に呼ばれることが結構多いんですよ。そのときに、やっぱり全然話せないと、「あ、はい」みたいな感じで、ずっと受け身みたいになっちゃって。

――そうか。

北野：そうですね。やっぱり大企業とかすごい人を相手にすると、全部受け身になっちゃうのをよくないなっていうのをずっと反省してます。だから、実家とかこの間帰ったら、いろんなイベントに参加するのを、生徒会長になってからやるようにはなりました。

――その生徒会長としての役割を果たせるように、自分で自分を訓練するイメージだったんだけども。

北野：そうですね。

――それ自体は、つらいこと、楽しいこと？

北野：最初、生徒会長になったときに、話飛ぶんですけど、Ｗｉｆｉニーネーっていうのがあります。そのときに、慶応の大学生の方と話しました。僕が奥尻高校に来たきっかけは、「映像撮りたい」っていうことだったんですけど、映像撮りたいから奥尻高校来たのに、ほぼ何もやってなくて、ずっとぐうたらしてました。なんかもうほんとに投げ出しかけているみたいで、「何やったらいいんですかね？」みたいなこと聞いたら、「とりあえず、目の前にあることやった方がいいよ」って言われました。そのときに目の前にあったのが生徒会っていう役職で、生徒会長になりました。

そのときはぐうたらしてて、絶対あれやったら面倒くさいだろうなっていうのが、もう固定観念であったんですよ。でも、いざやってみると、実際大変だけど、でも何かを仕切れたり、何かを指示したりっていうことが自分は向いてるなっていうことがわかりました。なので、どっかイベントを予約して参加してみて。最初は、電車乗ってるときに、「やっぱ今日、遊んどけばよかったな」みたいなことを思ってたんですけど、いざ参加してみると、結構話したり、「こういう交流って楽しいんだ」ということに気づけました。面倒くさいっていうことは、あんまり思わなかったです。

――ありがとうございます。それでは次、同じことを海野さんに聞きたいと思います。やりがい。

海野：そうですね。やりがい、やりがいか。私の場合、今、やってい

る三つのことは、全部一応やらせていただいてるんですけど、中学の先生が私に勧めてくれて、「島に行けば」っていうふうに言ってくれて、調べて、見つかったのが奥尻だったんです。

オープンスクールのときに「うちの学校は、グループワークをすごくやるんだ。とっても、たくさん人前でしゃべるんだ」って話を聞いて、私はすごくしゃべるのが好きなんですけど、人前でしゃべるっていうことが嫌いって言ったら変なんですけど、よくしゃべるけど、人前であんまりしゃべりたくないっていうか、緊張したりあがり症もあって、すごくだめだったんですよ。それを改善したら、とんでもない強みになるんじゃないかっていうのをすごく感じてました。それでこっちに来たときに、「じゃ、グループワークする」ってなりました。

あと普通の都心の学校では、私だったら札幌なんですけど、その札幌の学校にいたときに、「はい、じゃあ授業でグループワークしてください」って言われたときに、真面目にグループワークしてる人って、全然やっぱりいないんですよ。札幌では授業だるいなっていうのがあって。「こうじゃない？」って言ったら、「まあ、そうだね」って流されちゃって終わって。それって話し合いじゃないよねって、私はずっとすごく思ってて。それが、「じゃ今度、話し合いができるよ」って言われたときに、話すのが好きなのですごくうれしくて。「じゃあ、ここにしよう」って奥尻に来ました。

実際来てみて、去年の一年生の一年間、たくさん人前でしゃべったんですよ。ＯＩＤに入ってから、最初にもう町長さんにプレゼンしに行って、町長さんの前でしゃべったんですけど、すごい緊張しました。

でも、「よくしゃべれるね」って言われて、自分のそれが長所だなっていうふうに認められるようになって、自信がついたりしました。人

にほめられるっていうのが、やっぱりうれしくて、それもやりがいです。

もちろん、自分たちで考えて、「いや、高校生が」って、「よその子が、よくこんなに考えてくれたね」って、そういうふうに認めてもらったり言ってもらえることが、すごく私にとってはやりがいかなって思いました。

――海野さんは、話の中身もわかりやすいけども、同時に自分の気持ちも伝えるタイプの話し方ができるよね。

海野：そうですか？　ありがとうございます。

――そういうのは、やっぱりプレゼンとかしながら、身についてきたということ？

海野：そうですね。私は中身もわかってほしいんですけど。「プレゼンテーションって、何のためにやってるの」っていう、「何でやるの」っていうのを前に先生に聞かれて、そのときに、「伝えたいことを伝えるため」っていうふうに、私は答えました。

けれど先生に「それは、手法であって、本当にやりたい目的ではないんだよ」っていうふうに言われました。「じゃ、何ですか」って先生に聞くと、「相手の心を動かすこと」と言われました。先生の例を借りると、例えば「私が今、塩ラーメンが食べたいとしたら、そのプレゼンテーションする人は、私をしょうゆラーメンを食べたいっていう気持ちにしなきゃいけないですよ」みたいな、「心を動かすっていうことをできるようになったら、『プレゼン、ほんとにうまくなった』っていえるんだよ」っていうふうに言われました。「お、これすごい」って思いました。

3　活動に参加して得たと思うこと、成長したと思うこと

他の生徒の素晴らしい姿を見て、劣等感ではなくてあこがれを感じたり、自分の向上心が芽生えている。こうしたことの背後には、前述の失敗を経験値とできる環境や、発言の場が多く自分自身を見つめる機会があることが影響しているものと思われる。

そのときに、高専、函館高専の子が来てて、函館高専の子、同じ高校生なのに、めちゃくちゃプログラミングできて。「なんでこんなプログラミング、同じ高校生ができるんだろう」と思って。そこに差を感じて、「自分はこのままでいいんだろうか」っていう心と、すごいあこがれ、「こいつすげえな」っていうあこがれの気持ちが重なって。いろいろ起業とか調べたり、いろいろ活動したりっていうのをやってたときに、考え方みたいなのが変わった感じですね。（インタビューより）

――それでは、次に移ります。

「自分が活動に参加して得たと思うこと、成長したと思うことはどんなことでしょうか」ということを、北野くんからお願いします。

北野：自分が活動に参加して成長したと思うことは、さっき海野が言ってた、発言の場が多くなったので。「自分がどう思ってるか」っていう、「自分がどう思ってて、何を伝えたいか」っていう、目的とか言いたいことだとかっていうのが、分けられるようになったのがあります。

――分けられるようになった。

北野：最初は結構、ぐちゃぐちゃにして、「これってこうでしょ」みたいな、率直な意見を話してました。率直な意見は意見で、かつ、「結局、この話し合いは何なのか」っていう、「何を目的とするのか」、「それはずれてないのか」だとかっていう、それも、生徒会を通じてできるようになりましたね。

――なるほど。ほかに、「自分自身で、自分が変わったな」と思うことか、家族や友達から「変わったな」というふうに言われたようなこととかありますか？

北野：家族と友達に「変わったな」って言われたのは、中学生のころはそれこそありがちなゲームだとか遊びだとかっていう話が多かったんですけど、自分が、九月辺りに奥尻であった起業のイベントみたいなのに参加して、面白いなと思って（変わりました）。

　そのときに高専、函館高専の子が来てて、函館高専の子、同じ高校生なのに、めちゃくちゃプログラミングできて。「なんでこんなプログラミング、同じ高校生ができるんだろう」と思いました。そこに差を感じて、「自分はこのままでいいんだろうか」っていう心と、すごいあ

こがれ、「こいつすげえな」っていうあこがれの気持ちが重なって。いろいろ起業とか調べたり、いろいろ活動したりっていうのをやってたときに、考え方みたいなのが変わった感じですね。

――同学年の人が頑張っているのを見ると、響くものがあった？

北野：ありました。「やっぱり、自分はこのままでいいのか」みたいな、「ボーっとしてるままでいいのか」みたいな感じと、あと「結局目的があって奥尻に来たのに、その目的を果たせないままでいいのか」っていうのがありました。響いたので、行動をできるようになったっていうのはありますね。行動をよくするようになったっていうのと。

あと、めちゃめちゃしゃべれるようになったっていうのがあります。結構人にアドバイスしたりします。地元の大都市に帰ったときに、中学校の友達が、「俺ってほんとはこういうことやりたいんだけど、みんながゲームとかばっかり話して、あんまりできないんだよ」って言ってるときに、俺が「それだったら、こういうふうな意識した方がいいよ」だとか、昔だったらあり得ない、人にアドバイスみたいなのもできるようになったのを思いました。

4　島留学の目的

北野君は、大都市から脱出しただけでなく、なぜ脱出するのか、脱出して何をしたいかを考えて奥尻島に島留学した。北野君は映像を志しているのだが、大都市で映像の技術を学ぶよりも大自然で映像感性を育てることを選んだ。

映像をつくるときに、絶対に圧倒的に感性を持っといた方が、自分はすばらしいものをつくれるなと思ってて……いろんな感性を若いころから取り入れて、大人になって映像をつくった方が強いだろうっていう意味の感性でした。（インタビューより）

――北野くんは、「この島に来るとき、なんか考えてたことがあった？」という話なんだけども。どんなことを考えてここに来たの？

北野：入学した理由が、さっき「映像」って言ったんですけど。大都市に出たいなっていう面がありました。だから、大都市のその映像の専門学校に行こうかなと思ってました。けれどお父さんが奥尻高校見つけてきて、大都市で映像の技術を学ぶか、大自然で映像感性を育むかって思ったときに、これは圧倒的に絶対若いうちに感性を鍛え上げといた方がいいだろうと思って、奥尻に来ました。

そのときに、「映像っていうツールを使って、いろいろ発信していきたいな」っていうのは思ってて、カメラもそのとき買ったんですよ。買ってきたのに、ほんとに何もやってなかったので、島留学はそれが目的で、その「映像を使ってやろう」というのがありました。

――もうちょっとだけ突っ込んでいいかな？

北野：はい。

――「感性を映像というツールを使って表現する、あるいは、それを

通して感性を豊かにする」というのは、どんなイメージだろう？

北野：大都市にいたときって、いろんな情報が回ってくるじゃないですか。だから自分の自我っていうのがあんまり持てなかったり、自分の意見っていうのが、あんまり持てなかったりするんですよ。でも、こっち来てから、自分から手に入れなきゃあまり情報は入ってこないし、全然、周りも地元と違って、やっぱり感じることだとか考えることって、場所によっても違ってくるじゃないですか。

それだけで感性も変わるし、北海道って一回も行ったことない地域で、かつ島留学っていう制度で、いろんな人たちのところに来て、いろんなことを話し合って、先に感性を鍛えていい映像みたいなのをつくったらよいと思いました。地元の大都市だったら、ちょっと話戻るんですけど。映像をつくるときに、絶対に圧倒的に感性を持っといた方が、自分はすばらしいものをつくれるなと思ってて。

映像技術とかは、もう大人にはかなわないから、「じゃあ、高校生の俺で、大人の世界にかなうものは何だろう」ってそのとき考えたときに、いろんな感性を若いころから取り入れて、大人になって映像をつくった方が強いだろうっていう意味の感性でした。

――なるほど。ところが、最初のころは？

北野：最初のころは、全然撮れなくて、ぐうたらしてて。生徒会長になって、ほんとに最近映像撮って、それを出して、賞取ったみたいな感じですね。

――すごい。おめでとうございます。

北野：ありがとうございます。

――いや、でもうれしかったよね。自分の課題が一つ達成できたんだから。

北野：そうです。でもほんとに、やっと一歩かなと思って。

5　活動に参加して得たと思うこと、成長したと思うこと

海野さんは、「よくしゃべれるね」って言われて、それが自分の長所だと自分で認められて自信がついた。人にほめられることがうれしくて、それらがやりがいとなった。さらに、企画書が作れるようになり企画を通して決裁も全部自分でできるようになり、何でもやろうと思えばできると自信がついた、と教えてくれた。

また、プロジェクトを行う中で企業活動をしている人とのネットワークが広がり、様々な機会を貰えるようになり、そのことが海野さんをさらに成長させている。

ここに来たから、人とのつながりがほんとにたくさんできた。で、自分がそれを紹介することもできるし、その人のよさを話すこともできるようになったし。もうほんとに、

いろんな能力が出れて、人脈も得たし、私がしゃべる力っていうのも、もともとちょっとあったものがもっと大きくなって得ることができたっていうのもありました。（インタビューより）

――はい、それでは、同じことを今度は海野さんに聞きます。活動を通して自分のなかで得たと思うこと、あるいは、成長したと思うこと、どんなことがあるでしょう？

海野：私は結構、たくさんあるなと思ってます。得たことというより、初めから私が持ってたものがあって、私調べることがすごく好きで。昔から、興味があることについては、すごい勢いで調べていくんですよ。刀にはまったときは、刀調べて、その歴史調べて、持ち主調べて、持ち主の歴史調べて、みたいな感じで、もう私はすごくのめり込んでて。そういうことがたくさんあって。

あと、それと同じくらい行動力っていうのが結構あって。友達がいきなり、前の日に「ちょっと明日朝七時半に集まって、どっか自転車で出かけようぜ」って言ってきて。「あ、いいよ」って言って。そのままほんとに七時半に集まって、自分の家から三時間ぐらいかけて、札幌記念塔、開拓の村まで、自転車でほんと行って。そういうことをやったりするぐらい、結構アクティブに動いてて。それで、今回奥尻高校に来て先輩たちに、「じゃあ、ＯＩＤやらない」って誘われて。最初はマーケティング部だったんですけど。その「マーケティング、やらない」って言われて。私は、頭があんまりよくなかったんですけど。

――そんなことないから。

海野：いえいえいえ。ほんとに学力がちょっと低くて。だけど、商業系に行ってみたりとかしたくて。それは、お金を稼ぐっていうことだったりだとか。祖父も父も、営業の仕事をやってたんですよね。私も、人としゃべることが好きっていうのもあって。じゃあ、自分の仕事についてとか、自分の使ってる商品についてだとか、人にいっぱい話して、契約をつけたりだとかしていくって、営業の仕事にすごいあこがれを持ってました。

「お父さんもおじいちゃんも、かっこいいな」って、昔思ったので、商業系にも行ってみたかったんですけど、結局、中学校の途中のときに、「いや、私には無理だ」って挫折しました。

それで奥尻に来て、こういうマーケティングができるような機会をいただいて。「じゃあ、これほんとにがんばってやろう」と思って。すごく試行錯誤したっていうか。一年目で、もう先輩も何していいかわかんないし、私もこの高校に入ってすぐで何していいかわかんないんですよ。

「じゃあ、Ｔシャツ売ります」ってなったときに、「企画書を作ってください」って言われて。「企画書ってどうやって作るんですか」ってなりました。すごくたくさん調べて、企画書作りました。それで、成功しました。「今度、企画して成功したっていう報告書を作ってください」って言われて。「報告書ってどうやって作るんだ」ってまたなりました。そういうのもずっとやって、やって、やって繰り返して。今はもう、企画書もだいぶスムーズに作れるようになりました。

それで、これやってて途中で、「あれ？　昔、商業高校入りたいって

言ってたけど、今、ここでもできてるぞ」と思って。「企画書も作れるようになったし。企画通して決裁とかも、そういうのも全部、自分で今できるようになったぞ」ってなって。何でもやろうと思えばできるんだなって、やっぱり思いました。私、「行動力がある」って、先ほど自分で言ったんですけど。例えば、「これ、ちょっといいんじゃない」って先生からフッて言われると、ちょっと火がついたらやりたくなっちゃいます。次の日にカタカタやって来て、「はい、じゃあ、やりましょ」みたいな感じでやったりします。

さっき「九月に起業のイベントがあった」って言ったんですけど、そのイベントは実は、ＯＩＤも自分たちの能力向上のために参加しました。そちらで、クリプトン・フューチャー・メディアっていう初音ミクをつくった会社の社長さんが来てくださって、伊藤さんっていう方なんですけど。伊藤さんとそのときに私、すごい話をして、質問させていただいて、「Ｔシャツを売ってるんですけど、どうしたらいいですか」みたいな話をすごい偉い人としゃべって、フィードバックもらうというのをやりました。

そういう、人とのつながりっていうのももらえて。その社長さんとつながったお陰で、また今年の夏に、「ホトハ」という、高校生が集まるカフェに行かせてもらいました。そこでは、ウカリっていう団体をつくっている種市さんという方だったり、いろんな方とほんとに出会わせてもらいました。「ステッピンアップ」っていうイベントが札幌であったんですけど、そちらの方にも参加させていただきました。「じゃあ今度、海野さんもぜひ、話してくださいよ」って言われて。そういった、ほんと人に発信する機会とかもたくさんもらいました。

ここに来たから、人とのつながりがほんとにたくさんできた。それで、自分がそれを紹介することもできるし、その人のよさを話すこともできるようになったし。もうほんとに、いろんな能力が出れて、人脈も得たし、私がしゃべる力っていうのも、もともとちょっとあったものがもっと大きくなって得ることができたっていうのもありました。

あとは、やっぱりＯＩＤやってて、マーケティングの能力というのも、自分の力にすることができました。ＯＩＤでやってたことで、すごく簡単なことなんですけど、ポジティブポスというのをやったんですよね。ポジティブポスって、人のいいとこを書いて体に張り付けるやつなんですけど。私、それすごい好きで。一年のときのこの手帳があるんですけど。手帳には私とあと同じ寮生二人。寮っていうか、民宿に泊まって下宿してる子がいるんですけど。その子たちとポジティブポスやったんですよ。そしたら、私「ババア」とかめちゃくちゃ書かれたんですけど。「それも含めてほめ言葉だぜ」っていうふうに言ってくれて、めちゃくちゃ面白くて。もう悪口みたいなのも書いてるんですけど、すごく楽しくて。それで、「いや、これあんたのいいところだから」と言って貼るんですよ。そしたら、体がすごい付箋だらけになるんですよ。これ、一つ一つほめ言葉って考えたら、めちゃくちゃうれしくて。

――そうですよね。

海野：はい、それで、「人をほめるって、こんな大事なことなんだな」っていうのとか、そういう感性っていうのもすごくもらえたなというのもあって。それを使うと、うまく結構、人と人との話し合いとか進められるようにはなってくるんですよ。それがすごく私にとって得たことかなって思います。

――今の話のなかで、「自分自身の気持ちの問題、感性の問題」と、それから「テクニック、技術としてのコミュニケーションのことも同時に得た」というふうに、そんなふうに考えていいですか？

海野：はい、大丈夫です。

――海野さん、中学時代は、今とおんなじような人だったの？

海野：全然、違いますね。私、中学時代は人間不信でした。だけど、一年の担任の先生が、すごくいい先生だったんですけど、クラスがすごいその先生のお陰で仲良くて。どんどんどんどん自分も「あ、大丈夫かもしれない」という前向きな気持ちになれて。それから二年間、あんまり変動なく過ごして。それで、ここにこんな感じで来て。そしたら、もっと前向きにしゃべれるようになったっていうのがあります。

――今や人間が好きになった？

海野：そうですね。嫌いなところももちろん、あるんですけど。やっぱり人と関わることは、自分は元からしゃべることが好きだったので、楽しくて、それを肯定できるようになったっていうのがあって。

――なるほど。

海野：はい。

――なんかすごいポジティブな感じがします。

海野：いや結構、話してたら、「ネガティブ」って言われるんですよ。だけど、私は前向きに持ってるつもりなんですよ。だから、「ネガティブだけど、ポジティブなんじゃない」って言って、人に話してるんですよね。

――ネガティブだけどポジティブ？

海野：そうなんですよ。なんか、矛盾って面白いなと思ってて。

――でも、ポジティブなだけだったら、天然かもね（笑）。

海野：そうなんですよね。

――それとは違うことだよね？

海野：はい、ちゃんと考えてる。

6　地域への想い

北野君にとって、奥尻島への想いは奥尻の人たちとのつながりによって形成されている。北野君は奥尻に来てすぐに地域の人と打ち解けることができた。彼は大都市での生活で無意識のうちに

「人のコネクト」の薄さを感じていたのかもしれない。

でもやっぱり、こうやって打ち解ければ、すぐ打ち解けられるし、……すぐ仲良くなれる、打ち解けられるみたいな感じで……そういう環境に地元の大都市とかでは恵まれなかった。人と人との温かさっていうか、つながりがもうめちゃくちゃ深く感じられたなっていうとこで、地元の大都市じゃなかった地元愛っていうのが、来てすぐ生まれました。

こういうところで人の温かさを学んだのに、結局は俺も地元の大都市の人間の一部になっちゃうんだろうなみたいなことは絶対嫌だなと思うんで。なんで、こういうのをつなげていきたいなっていうのは、ほんとに思いました。（インタビューより）

海野さんは、奥尻の人間関係の難しい面との出会いを経験している。その結果、単純に地域の人間関係が好きという感情を持つのではなくて、地域の人間関係を面白いと述べ興味を対象化している。

はい、なんか好きって言っちゃうと、悪いこともあるから好きとは一概には言い切れないんですけど。それ、面倒くさいなって思うこともあると思うんですよ。（インタビューより）

悪いことっていうか、悪いうわさがすごく早く回っちゃうのは、お互いによくないことではあると思うんですけど。でもだから、それだけ回るの早いから、つながりが深い人ほど、ひとこと言うだけで周りに影響力与えれるから、みんながみんな影響力強いっていう感じで面白いなって、すごい思ってるんですよね。（インタビューより）

なお、海野さんの話から推測されるのは、好きだし嫌いでもあるという意味で、奥尻の人間関係に深く入り込んでいるように思われる。

好きっていうのもあるのかもしれないけど、嫌いっていうのもやっぱり同時にあるので、私のなかでは「面白い」っていうところにあるのかなって思います。（インタビューより）

――それでは、次にいきます。「地域についての思い」。二人とも、外から来た人なんだけども。ここの地域についての思いを聞かせてください。

それじゃあ、最初に北野くん。今、奥尻島に対してどんな思いを持っていますか。

北野：奥尻への思いについては、めちゃくちゃ熱くなったみたいな。

――熱い？

北野：熱いみたいな感じで。その理由としては、やっぱり比べちゃうんですけど。地元の大都市にいたときに、マンションの隣の人はまだ近所とかは知ってるけど、隅々まで知らないじゃないですか。「じゃあ、マンションの一三階の人は、誰誰だ」みたいなことは知らなくて。

でも、こっち来てから、人と人とのつながりの温かさをめちゃくちゃ感じれて。その理由としては、学校の、確か外から来た人を出迎えたイベントに地域の人も来てたんですよ。そのときに、その地域の人と会って話したときに、自分が住んでるところにめちゃくちゃ近くて、「じゃあ、今度遊びに来な」って言われたときに、「あ、わかりました」と言って、その週の土曜日に行ったんですよ。遊びに行って、お茶とかお菓子とかもらって、話してたら、「自分、映像やってるんですよ」っていうことを言ったら、そのときに、「あ、じゃあ、これ持っていきな」って、いいドローンをくれたんですよ。ドローンくれて、そこにカメラついてて。「あ、じゃあ、これで映像撮れるじゃない」って、「え、ほんとにいいんですか?」みたいなこと言って。ほんとは外から来る人に対しては、あんまり仲間に入れないと思うんですけど。

でもやっぱり、こうやって打ち解ければ、すぐ打ち解けられるし、こんなすぐ、「すぐドローンくれる」みたいな、すぐ仲良くなれる、打ち解けられるみたいな感じで。

そういう環境に地元の大都市とかでは恵まれなかった。人と人との温かさっていうか、つながりがもうめちゃくちゃ深く感じられたなっていうとこで、地元の大都市じゃなかった地元愛っていうのが、来てすぐに生まれました。

「第二の故郷になるんだろうな」って思いながら奥尻来たけど、もうそれがほんとに入ってすぐのことだったから、やっぱり地元っていうのが感じられたみたいな。

――そうすると、北野君の住んでる地域では、住んでる人がもうみんな顔見知りになった?

北野：ほぼ顔見知りですね。ほぼ知ってて。特に、ほかの箇所と比べて、一番人口が少ないんですよ。なので、車とかが通ったら、「誰誰さんだ」みたいなことがわかるし。「もう、なんでここにこういう人がいるか」とか、「隣、今日いないよ」みたいなのは、もうすべてわかるんで。

そういう面に関しても、やっぱり高齢者が多いんで、「誰誰さんが具合悪くなった」っていう情報とか、「誰誰さんがどっか行ってるから、誰を見守っといて」みたいなのが、そういう地域間でできるのが、めちゃくちゃいいなと思って、一つのコミュニティーみたいな、コネクトみたいのが。

――ちょっと教えてほしいんだけど。ああいう地域だと、例えば、北野くんが元気のない顔をしてたら、そういうことはみんなが気にしてくれるわけ?

北野：結構、気にしてくれますね。俺が、今民宿に下宿せてもらってるんですけど、俺が具合悪くて、「ちょっと具合悪いです」って言ったときに、民宿の人に出会って。そのとき、そしたらかぜ薬すぐ取ってきてくれて、「じゃあ、今日は、安静に休んでな」とか、「冷えピタとか、氷枕とかあげようか」みたいなことを言われて、「ありがとうございます」みたいな。

なんか地元の大都市だったら、あんまり他人のこと気にしないっていうか、他人の事件とか、他人の人生に関わりたくないみたいな考えが多いと思いますけど。

人とのコネクトって、これほど大事だし、これほどめちゃくちゃいいことなんだっていうことを知って、なおさら大切だなっていうことを思いましたね。

――北野くんとしては、そういう人間関係はいい感じ?

北野：人間関係いい感じだし、これ自体をなんか将来につなげていきたいなと思いましたね。職業とか就くときに、最初はどっかの会社で高収入で稼げればいいやみたいな。ほんとにＡＩ時代だから、いろんなことはＡＩに任せればいいやみたいことを思ってたんですけど。でも、それこそＡＩ時代になって、人と人との関わりが少なくなってるときで、こういうところで人の温かさって学んだのに、結局は俺も地元の大都市の人間の一部になっちゃうんだろうなみたいなことは絶対嫌だなと思うんで。なんで、こういうのをつなげていきたいなっていうのは、ここに来てほんとに思いました。

――すごくいい関係がつくれてますね。

北野：つくれました。

――じゃあ海野さんもおなじこと。

海野：はい、そうですね。ほんとにその地域の関わりっていう点で、「うわさが回るのが早い」とか、「地域のつながりが強い」とか、「ご近所さんが顔見知り」だとかそういうのって、田舎とかちょっとせまいコミュニティーだからこそある面白さだなって、私はすごく思ってます。

それが壁になってるってことも、ちょっと課題になってるっていうのもあって。それに焦点をあててるのは、パブリシティがあるんですけど。

ＱＯＬ、生活の質の調査を慶応大学のチームがちょっと前にやった、数年前にやったんですけど。そのときに、「隣人関係が一番困ってる」って実は奥尻島で出てて。「おや」ってなるんですよ。「あんなにご近所さん仲いいのに、隣人関係で困ってるんですか」ってなって、私も結構、びっくりしたんですけど。それ聞いたときに、「それで島から出て行っちゃう人がいた」っていうのを聞いて、「強い」とか、「強すぎる」っていうことがいいことなのか悪いことなのかは、ちょっと考えるところもいろいろあると思うんですけど。

私は自分が話してて、自分がいいと思ってる人のことを悪く言われるのは、やっぱり嫌だなと思ってるので。そういうのって、結構学校の先生って悪く言われてるんですよ、地元のなかで。

――ほんと？

海野：はい。「よそ者だから」っていうのもあって、先生方ってやっぱりお仕事あるんで、遅くまでいて、地域に交流する機会もなかなかないっていうのもあって、結構誤解されてて。

「あの先生は、よく生徒に怒ってるんだ」とか、「いや、あの先生、な

んか暗いわ、雰囲気」とかって言って。それ聞いたときに、「え？　全然そんなことないですよ。もう学校だと、めちゃくちゃはじけてますよ、先生」みたいなのがあって。それを、誤解したまんまにしとくのが、すごくもったいないっていうか、私としても嫌なので、じゃあ、私がその誤解してる人と仲良かったから、「いや、違いますよ。この人、こういう人なんですよ」っていうふうに言えるから。

私、そういう点ですごく、地域の人と仲良くさせていただいてます。自分たちには、島おじっていう関係があるので、その島おじの方ともすごく仲良くさせていただいてます。そういうときに、地域で例えば、「隣人関係困ってる」っていう結果があって、「先生のこととか、自分の友達のこととか、誤解してる人がいるんだよね」ってなったときに、「じゃあ、どうしたらいいと思う」っていう相談を、その島おじの方にしたりだとか、自分が仲良くなった人にしたりだとか、そういうこともできるっていう点で、すごくいいなって、私思ってます。

悪いことっていうか、悪いうわさがすごく早く回っちゃうのは、お互いによくないことではあると思うんですけど。でもだから、それだけ回るの早いから、つながりが深い人ほど、ひとこと言うだけで周りに影響力与えれるから、みんながみんな、影響力強いっていう感じですごい面白いなって思ってるんですよね。

――面白い？

海野：面白いと思います。

――「好きだ」ではなくて、「面白い」？

海野：はい、なんか好きって言っちゃうと、悪いこともあるから好きとは一概には言い切れないんですけど。それ、面倒くさいなって思うこともあると思うんですよ。

――学校さぼって歩いてたら、すぐバレるという？

海野：バレますね、絶対それ。それ絶対バレると思いますね。北野くんもさっき言ってたんですけど、私もかぜひいて、最近寝込んだんですよ。そのときに、やっぱり寮母さんはすごいやさしくて、おかゆ運んできてくれて。二階の部屋なんですけど、わざわざ階段上り下りして、おかゆ運んできてくれて、氷枕換えてくれて。薬と栄養ドリンクまでわざわざ持ってきてもらって、「大丈夫？　大丈夫？」って、なんかもう一日に四回ぐらい見にきてくれて、「あ、大丈夫です」って言いながら寝てたんですけど。

そういうのもあって、家族じゃないけど、家族みたいにほんとに考えてくれてるっていうのもあります。たくさん話してると、やっぱり町立に移管して、こういう島外から人を呼ぶようになって、それを受け入れをするって考えたときに、「じゃあ、この子たちを預かるってなったら、私たちどうしたらいいんだろうね？」っていうことを、ほんとに一年目は、「はい」ってすぐ言わなかったみたいなんですよね。○○さんっていう方が私の寮母さんですが、「はい」って言わなくて、「一年目、どうしてやらなかったんですか？」って聞いたら、「一年間、家族でちゃんと会議して、話して。それで二年目、『じゃあ引き受けよう』ってしたんだよ」っていうのを言ってくれて。それだけ、島の外から来る人のことも考えてくれてるんだなっていうふうに思ったりとか。

私が見えてる世界って、やっぱりせまいコミュニティーの中のせまいコミュニティーなので、全部通して見てるわけじゃないから、まだ何とも言えないですけど、ほんとに密接っていうか、ちょっとすぐそこ歩いてたらすぐ、「あ、あれは高校生の何何だ」みたいな、気づいたら名前広まってたりするんです。特に中学生とかすごく早くて、そういうのもあるんで。好きっていうのもあるのかもしれないけど、嫌いっていうのもやっぱり同時にあるので、私のなかでは「面白い」っていうところにあるのかなって思います。

――なるほど。

海野：はい。

――そういう意味での海野さんは、さっきの繰り返しになりますが好き好きっていう天然の好きではなくて。

海野：そうですね。好きだけではないかなっていうのがあります。

7　地域との将来のかかわり方

北野くんも海野さんも、卒業後に地域と関わり続けたいという。二人は関係人口としてかかわることを模索している。

地域との関わり方は、従来は定住人口となるか交流人口（観光や研修での訪問客）となるかの二択で捉えられてきた。しかし、最近になって関係人口という考え方が生まれ、関係人口が地域活性化に果たす意義が明らかにされてきた。関係人口は定住人口と交流人口の間のどこかに位置づけられる人々であり、インタビューの中で海野さんが風の人と言っているのは関係人口のことである。関係人口となった人は、地域の外に住んで地域に対して金銭的支援や知識、技術の支援を行う。地域住民と地域外の人とをつなぐことも行う。地域を紹介する人も関係人口である。

大学入ってからも、ちょっと役場の方に顔出させてもらったりとかして……高校の方に私が話をさせてもらったり、交流したりする機会をいただいたり、そういうことで関われたらいいのかなって、すごい思ってます。（インタビューより）

「〝土地の人〟には、好きだけどちょっとなるのは今は難しい」とか、私は好きだけど、奥尻にずっと住むことは、自分がやりたいこともあるから難しいと思ってるので。「〝土地〟じゃないけど、土になるんじゃないけど、風にはなれるよね」っていう、ほんとに関係する人をどんどん増やして、周りを巻き込んで、奥尻とつないでいけたらいいなっていうふうに考えてます。（インタビューより）

――それでは、次、続きます。将来、この地域とどう関わりたいですか。北野くんからお願いします。

北野：５Ｇの時代になって、「映画一本一〇秒ぐらいで誰でもダウンロードできる」っていう、それこそ映像がめちゃめちゃ何か広告だとかっていうのにいろいろ使われる時代で、その映像っていう最強のツール、個人的には最強のつなぐツールだなと思ってます。それで、奥尻のいろんなものを撮ったり、これからやっていきたいなと思ってることなんですけど、撮ったり、奥尻自体をもうブランド化しちゃって、それを映像でアピールするみたいなことを、もしかしたら、奥尻じゃなくなるかもしれないんですけど。でも、奥尻で映像を使った関係の仕事はやっていきたいなっていうことを思ってて。

あと、さっき言ったんですけど人と人とのつながりっていう、僕の地元にはない漁業だとか、その自然の関係者っていうのが、やっぱり北海道って多いじゃないですか。特に、この島だったら。だから、その人たちとも関係を切らさずに、将来例えば僕がこういう交流、交通関係みたいな仕事に就いたとしたら、「じゃあ、地元の大都市まで魚を輸送する手伝いをするよ」みたいな、そういう面で俺が奥尻の、地元の友達とか奥尻の人たちを助けたり、僕自身が何か困ったときに、奥尻の人々に助けられたりっていう、そういう関係を卒業しても築いていきたいなって思います。

――それは、「具体的にはどういう方法かっていうのは、まだ明確じゃないけども。一つ、映像という自分の強みを生かしたい」という、そんなふうに考えてよろしいですか？

北野：はい、そうですね、はい。

――それでは海野さんは、高校卒業してどうしましょう？

海野：私は大学進学を今、考えていて、慶応大学総合政策学部っていう学部に行きたいんですよ。その学部が何をやってるかっていうと、地方創生のことだったり、そういったローカルなことだったりとか。あと、ほんとに町おこしみたいな、そういうこととかに目を向けて考えたり、いろいろ動くような学部なんです。

特にそれで最先端っていうか、もう一歩先をいってるのは、日本ではやっぱり慶応大学なんですよね。私はすごくそういう、ほんとに行きたくて。そこで勉強して、今考えてるのは、ほんとに海外に行きたいっていうか、途上国とかを発展させたいみたいな、そういうのも考えてるんです。けれどそれよりも今後、私は今やってることを、もう置いてくんじゃなくて、大学入ってからもちょっと役場の方に顔出させてもらったりとかして、昔いた卒業生として、「こういうの、どうですか」とか。

あとは、ほんとに卒業して、もし大学行ってから、もう高校の方に私が話をさせてもらったり、交流したりする機会をいただいたり、そういうことで関われたらいいのかなってすごい思ってます。

あと、お世話になった寮には、やっぱり年に一回とかは行きたいなっていうのもすごいあるので。そういうふうに、つながりを切らずに関わっていきたいなって思ってます。

私ができることは、今この発信することだったり、○○荘にいる女子で、離島にいる女子高校生だから、「離島ＪＫ」っていう言葉を作ったんですよ。「離島ＪＫってすごくない」って言ってます。

「そういうことをせっかく言えたんだから、『じゃあ、離島ＪＫやって

ました』っていうのもあるから、もっとよさを発信していこうよ、今のうちに」って言って、「今のうちに発信した」っていうことを、そのまま大学とかどこ行っても持っていきたい。

私でも関係人口を増やすことって、多分すごいできると思うんですよ。だから、「〝土地の人〟には、好きだけどちょっとなるのは今は難しい」とか、私は好きだけど、奥尻にずっと住むことは、自分がやりたいこともあるから難しいと思ってるので。「〝土地〟じゃないけど、土になるんじゃないけど、風にはなれるよね」っていう、ほんとに関係する人をどんどん増やして、周りを巻き込んで、奥尻とつないでいけたらいいなっていうふうに考えてます。

――離島ＪＫ？

海野：離島ＪＫです。面白いですよね。

――うん。

海野：なんか言ってて、「うわ、なんかすごい現代っ子っぽい」と言って、結構写真撮って、ネットに上げるっていう。海のきれいさとか、

――そういうサイトを作るの？

海野：サイトはまだです。サイトとかの運営はしてないんですけど。「今後、なんか企画を考えていけたらいいよね」っていうことで、今自分たちがやりたいことをそれぞれいっぱいやってて忙しいんですけど。残せること何か一つ残したいなっていうのがあります。

――二人とも共通して、関係人口として今後関わっていきたいけども、そのやり方については模索中？

北野：そうですね。

海野：私は大学にほんとに入れたらですけど、大学のなかで学んでる地方創生を、奥尻に知識をどんどん渡していけたらいいなっていうのを、すごい思ってます。

――そうか、すごいです。

海野：はい。

――大学に入り込んで、大学の知識をこっちへ渡す？

海野：渡す。「担い手ってやっぱり、地元の子どもたち」っていうのが、すごい私はあるので。例えば、今ここにも地元の高校生、高校生っていうか、地元の中学から高校に来た子たちがいるんで、結局その子たちの親は、地元にいるわけじゃないですか。だから、自分たちの家だから、そこをなくさないためにって、その子たちが主体的に動けるようにした方が、多分地元の人もやっぱりつながり深いんで、喜ぶと思うんですよね。

部外者がやったら、「いや、押し付けがましい」とかっていうふうな

ことも、まだ言われちゃうっていうのも、私実はＯＩＤやってたときにちょっと体験してて。Ｔシャツ売ってたんですけど。「遠征費を稼いでますよ」って、その宣伝で歩いただけでも「押し売りしてる」っていうふうなクレームが入ったりだとか、そういったこともあったので。

身内っていったらあれですけど。中の人、土の人になる人たちが、もっと軸をしっかりできれば、自分たちでほんとに人口を増やしていけるんじゃないかなって思ってます。

――そっか。二人とも島外から来た人で。島外から来たから、の利点もあるかもしれないけども。同時に島外から来てるから、地元との関係づくりにおいて、考えなきゃいけないこともありそう？

海野：そうですね。

結構、っていうか、もうたくさんあると思います。やっぱりご近所付き合いってなかなか、現代は難しいと思うので。

昔、近所付き合いとかがあった文化っていうのが、例えば夫婦が住んでたとして、家族が住んでたとして、その横に住んでるおばあちゃんがいたとして、お母さんが家にいるときに、その隣のおばあちゃんが煮物教えてくれるとか、日本はそういう文化って昔あったと思うんですよ。でも、今ってそんなことないじゃないですか。隣の人が来て、「あ、煮物教えてあげるよ」なんて、なかなかないと思うんですよね。なんだかそういうのがないなかで、島ってそういうの、まだ多分あると思うんですよ。なんか「煮物作ってきた」とか、「おすそ分け」とか、そういうのがたくさんあると思うんで、それをその土地の子たちが自分たちで守っていけたらいいなって思うんですよね。

――いいことだと思います。

海野：はい、ほんとに。

――「土地の子たちが当たり前のことだと思ってることが、大事なことなんだよ」とか、「それを守るために、こうしたらいいんだよ」というようなことが、地元にいるとちょっとわかんなかったりするかもしれないからね。

海野：そうなんですよね。

８　インタビュー項目終了後のフリートーク：関係人口として

二人は奥尻高校の今には満足・安心しているがこれからも取り組みが継続していけるかについては心配し模索をしている。高校の中での継続の仕組みだけでなく、地域の中での変革への抵抗感と向き合うことも模索している

地元の人がまだ、抵抗感みたいなのがあるんで、それを変えたいなってずっと思ってます。でも、それってやっぱり地元の考えって根深くついてるから、めちゃめちゃ難しいんですよ。……それを変えるんじゃなくて、もうちょい、もっと

他の人を巻き込んで、奥尻高校だけじゃなくて、実際奥尻高校って島全体を高校としてやってますけど。
そこをつるんでいけたら、そういう抵抗感がなくなったり、もっとからんだり、何か発信していくことがおもしろいかなっていうことを多分、気づけると思うんですよ、奥尻だったら。（インタビューより）

――あらかじめこちらで用意したのはここまでなんですけども。その他なんか、「これ言っときたい」ということがあります？

海野：わ、何だろ？　その他？　そうですね。

――どういう順番でも。これは。

海野：なんかある？

北野：海野さん、言いたいことあったら、先いいよ。

海野：そうだな。奥尻高校は、今は多分、普通科の高校では上の方にいると思うんですよ。こういう取り組みとかをたくさんやってて。だけど、闘争心がなくなってくると、すぐストンって落ちる位置にいるんですよね、今。だから、闘争心をなくさないために、例えば今、私のその後輩が一人って言ってたように、ＯＩＤの存続だったり、高校自体の発展の仕方とか、そういう点をすごく、私たち自身ももちろん、模索してるんですけど、ほかの人からの外部の視点もいただきたくて。

なので、ちょっと広報していただければ、奥尻高校はほんとに、いろんな大学の方が来てくれてて、お話とか聞いたりもしてるので。そういう面で来てくださったらいいなっていうのもあります。

――そうですね。

海野：はい、ぜひ、そういったことを広めて。

――今やってること、ほぼ合ってるように思います。

海野：そうですか？　やり方もあっていますか。

――資源に乏しいところが、「完璧な計画を立ててやろう」とか、あるいは、外から豊富な資源を投入して、何か新しいことをやろうとするよりも。今あるものを大事にして、今あるものから何か作っていく。これを料理の方法に例えて、あるもの使いの料理とかあり合わせ料理とか、そういう言い方をするんだけれども。

作っていくなかで、料理の形ができてきて。で、また発展して。「次、こういう料理を作りたいな」という。いきなり完成形を考えるんじゃなくて、周りにある物を使ってスタートするというやり方をされているので、持続可能性という意味で、あるいは、地元の生態系を壊さないという意味で、その場での創意工夫が楽しいという意味で、正しいことをなさっているように思います。

海野：ありがとうございます。

――なんか言いたいこと、言っておきたいこと、あるいは、聞きたいことでもいいし。

北野：まあ、大体海野が言ってくれたんで。

確かさっき言ったんですけど。地元の人がまだ、抵抗感みたいなのがあるんで、それを変えたいなってずっと思ってます。でも、それってやっぱり地元の考えって根深くついてるから、めちゃめちゃ難しいんですよ。

それで、さっきの話聞いて、それを変えるんじゃなくて、もうちょっと、もっと他の人を巻き込んで、奥尻高校だけじゃなくて、実際奥尻高校って島全体を高校としてやってますけど。

そこをつるんでいけたら、そういう抵抗感がなくなったり、もっとからんだり、何か発信していくことが面白いかなっていうことを多分、気づけると思うんですよ、奥尻だったら。だから、もうちょいそこら辺を変えていきたいなっていうのは、今聞いて思ってました。

――あと、奥尻のなかでも、「変えていきたい」と思ってる大人もいるみたいですね。

海野：そうなんですよね。すごくアクティブな人と、全く興味ない人と、「全然、そんなんやんなくていいよ」ってなってる人たちがいて。そうなんですよね。

役場の人と、地元の人と、学校とで、結構位置付けが平面ではないっていうのがやっぱりあって。それを今度、平べったくできたら、一番

協力しやすいなっていうのは、やっぱりあるので、はい。

――それができるのは、高校生かもしれません。

海野：そうですね、ほんとに。

――そして高校生は助けてもらえるところがあるから。

北野：確かに。

海野：みんなそうなんですよね。
　みんななんか、「いや、高校生は今のうちに、何でもやっときなさい」って言うんで。やっぱりほんとにそうだと思うので、はい、やっていけたらと思います。

――じゃあもう、皆さんのなかでは、戦略もしっかり立ってるようなので、それは間違いないと思うので、楽しみにしています。

北野：やってみます。

海野：はい。ありがとうございます。

――今日はお忙しいところ、ありがとうございました。